

2013リトルリーグ インターミディエット部門

アジア・パシフィック大会の参加について

インターミディエット日本代表監督 北谷 敏寿

ASPAC' 13に参加させていただいて、まず、驚いたのは、フィールドの状態が非常に悪いことでした。全面芝なのですが、でこぼこで、イレギュラーは当たり前です。

また、審判はボールを取らず、セットからの牽制ではなく、振りかぶってからの牽制もあり？… ありません。

そういった中で日本チームは、どの国が手強いかを確認し、決勝に残るであろうチームを想定の上、投手のローテーション、球数（登板間隔）を決定し、調整させました。

力に差のあるチームとの対戦は、次戦における守備と打撃の練習と位置づけ、打撃においては、大振りをさせず、コンパクトスイングを心がけさせました。

それは、国内における土日曜ごとの戦いとは異なり、このような国際大会における連戦のゲームと、その先にある戦いを想定しての戦い方です。

この先の、アメリカでの世界選手権においても、連勝で行ければ、投手登板の間隔に余裕ができ、有利に戦えますが、負けて敗者復活に回った場合の球数の制約や投手登板の間隔など、選手起用におけるベンチワークの難しさを考えさせられます。

アジア・パシフィック大会決勝戦での対戦における予選第2位(4勝1敗)のグアムは、技術、戦術では負ける相手ではないのですが、体格の差と強肩の投手陣は、一番対戦したくないチームであり、本当に脅威でした。

ただ、すべてにおいて粗削りなところが弱点であり、相手打者には、ボール気味の速球で追い込み、ボールになるスライダーや、ゆるいカーブで攻めさせました。

打撃においては、グアム投手陣はめっぽう早いが、コントロールが良くないので、ボールをしっかり見極め、球数を投げさせながら、ストライクを取りに来るところを狙わせました。

これは、選手たちのこれまでの練習の成果とベンチの指示に忠実に答えてくれたこと、これがアジア・パシフィック代表という結果につながったものです。

他には、ベンチワークとして、対戦の外国チームは、自チームの投球数や登板間隔のルールにルーズで、ルール違反の選手交代をさせるので、事あるごとに本部に対し交代選手の確認を要請することとなりました。対戦チームの投手当番記録のチェックは必須でした。

最後になりましたが、今大会において、選手たちが他の国の選手たちと言葉も通じない中で、とても楽しそうに、また、見たこともない笑顔で遊んでいたことが忘れられません。本当に素晴らしい国際交流でした。

とてもいい経験をさせていただける、このようなチャンスを頂いたことに対し、日本リトルリーグ野球協会様、また、このような盛大な素晴らしい大会を運営頂いたフィリピンリトルリーグ野球協会の皆様には感謝いたします。また、来年参加できるように頑張ります。

2013. 7. 13

泉佐野リトルリーグ インターミディエット監督
兼 リトル・シニアリーグコーチ 北谷 敏寿